山と博物館

第43巻 第9号 1998年9月25日 大町山岳博物館

人の頭より大きなスズメバチの巣を採取中の筆者

蜂の巣採取四十年

有賀 叶

私の長年の趣味のひとつに、蜂の巣採取があります。かれこれ四十数年になりますが、どうでしょう、採取した蜂の巣は年に…数十個、今日までに五百個は越えていると思います。以前、知人や近所の人に頼まれてはスズメバチ（クマンバチ）、アシナガバチの退治をしたのが今日まで続いているわけです。

スズメバチ、アシナガバチというのは非常に獰猛で毒性が強いため、集団で襲われるとクマでさえ命を落とします。新聞で人が蜂に襲われたというのも、これらの蜂なのです。

スズメバチなどの大型の巣を取るときは、全身を完全に覆った格好で作業をします。体がすっぽり収まるビニール製のウエアを身にまとい、ヘルメットをかぶり手袋を着用します。こうした用具はすべて手作りで、これまで試行錯誤の連続でした。裾の部分が滑ってまくり上がらないように布にしたり、手袋の革を重ねたり、首筋まで覆うヘルメットに改良したり完全武装の出陣です。

実際に作業をするのは仕事の合間を見たり、営業時間後の夜間か、休日に出かけることになります。市内はもちろんのこと、白馬から小谷、八坂村まで出かけて行きます。今年は天候不順のためか、巣作りも屋根裏とか壁の中や縁の下などさまざまで、大変苦労をしています。

『趣味がもたらしたボランティア活動』、『頼もしい仕事人』などと、かつて新聞にも掲載されましたが、内容は地味なもので、蜂の巣駆除七つ道具、蜂を一時的に眠らせる特別な麻酔剤等、経費面も四苦八苦の状態で、蜂と日夜、格闘をしています。シーズンオフには蜂供養を欠かすことが出来ません。

（大町市在住）

最近の北ア山麓両生・爬虫類事情

長沢　武

1、はじめに

筆者は九一年六月、本誌三六巻第六号で、「最近の北ア山麓両棲類事情」と題して、ハクバサンショウウオ、ヒダサンショウウオ、タゴガエル、モリアオガエルについて書いたが、その後、同地域は開発・圃場整備・休耕田の強化・村誌編纂・自然環境調査・自然保護団体の発言とマスコミの動きなど、社会状勢・自然に対する考え方の変化等により、いろいろ様変わりしてきている上、昨年あたりから環境ホルモンも問題となり、自然環境に変化が起っているので、それらを紙面の許す範囲でとり挙げてみたいと思う。

2、トノサマガエルとトウキョウダルマガエル

北アルプス山麓におけるトノサマガエル群（トノサマガエル、トウキョウダルマガエル、ダルマガエル）の分布状況は、姫川流域は全体がトノサマガエル、高瀬川流域は中綱湖の辺りはトノサマガエル、木崎湖以南梓川までの安曇野はトウキョウダルマガエル、松本市から南はトノサマガエルの分布域で、両者の分布が接する松本～塩尻市北部には両者の雑種と見られる中間的形態の蛙が見られ、岡谷市ではダルマガエルが県内では唯一分布している。

ところが近年各地で行われている水田の圃場整備や休耕政策によって、彼等の生息域や生息数は一般に極端に減ってきている。大北地域を例にとると、大町市では三日町の水田をはじめ各地で多数生息が見られたトウキョウダルマガエルは、今年六月末の調査では全くと言ってよいくらい姿を見ることができず、かろうじて木崎湖南の水田で多数の生息と鳴声を確認することができた。美麻村でも同様で、九六、九七年と二年続けて村誌編纂の関係で村内全域の水田地帯で生息調査を行ったが、以前は見られた該種の姿は全く見られなかった。

しかし、白馬村では逆で、以前強湿田であまり生息していなかった神城地区のトノサマガエルは、圃場整備によって乾田化した今日では、該種は昔より生息数を増している。しかも、沢渡地籍では九五年頃から、以前は見られなかったトウキョウダルマガエルとの雑種の中間形態のものが急に見られるようになり、その数も多い。

佐野坂峠と呼ぶ山地が大町市との間にあり、蛙自身の力ではとうてい越えることのできない場所なのに、何故白馬村でこの雑種が急増したのか疑問が尽きないところである。

3、モリアオガエル

前の報告でも、該種が国の減反政策で山田などが耕作を放棄されたり転作田となり、産所を失いさまよっていることを書いたが、今回はその結果起った現象を三つ紹介したい。

その一つは今まで該種の産卵が見られなかった大町市の居谷里湿原で、産卵が見られるようになったことである。大町市の該種の既知の産卵地は青木湖スキー場南の湿原の池、黒沢湿原の池、ヤナバスキー場南の中シマの溜池、和地場の水田であった。いずれも姫川谷から白馬山麓を経由、北から南下して分布を広げてきているもので、美麻村でも同じで、村の中央部に達し、一部は当信川の流域にまで分布を広げている。

二つ目は白馬村八方地籍の例である。九五年の調査で、該種の一〇匹近い盛んな鳴声がするけれども、五〇㍍四方を探しても産卵するような水面は全くないので、その中央に建っている水道の配水タンク（コンクリート製円筒形で高さ八㍍、屋上は周囲が帽子のつば状に湾曲し、そこに水が溜まっていた）の下で考え込んでいると、どうも鳴声は屋上からのような気がするので、まさかとは思いながらようやくの思いで屋上に昇って見ると、なんとその僅かな水溜まりの落葉の上に、二つの産んだばかりの該種の卵塊を目撃した。

三つ目は近年建設が進んでいる砂防堰堤の堆砂池が、該種の格好の産卵場となっている話。昨今、村誌の調査で小谷、白馬、美麻村の森林帯の沢筋を、サンショウウオの調査に歩いていてよく出合す光景であるが、砂防堰堤の堆砂池がまだ砂が満タンにならず、池状に水が溜まっているものに、モリアオガエルの産卵が随所で見られることである。これは自然破壊が問題となっている河川工事で、唯一の怪我の功名の例である。

写真1．トノサマガエルとの中間型のトウキョウダルマガエル
1996年6月　白馬村神城沢渡の水田。近年この雑種が急増した。

4、タゴガエル

該種については村誌自然編の調査で、小谷、白馬、美麻、八坂村と広い範囲にわたり調査する機会を得て、大北地域における分布状況を知ることができ好運に思っている。まず分布の概況から述べると、該種もモリアオガエルと同じく当地域では北から南へと分布を広げてきた感がある。白馬、小谷村では姫川の東西両山地に広く分布しており、西山地のものは大町市まで伸びている。即ち大町市では青木湖スキー場南の小沢に多数産卵するほか、鹿島川の大谷原でも筆者は産卵を確認している。

また、東山地のものは美麻村北部にまで分布していて、片岡沢の各支流

域に生息しているほか、峠の沢でも生息を確認したが、これより南部では生息を確認することはできなかった。

なお地質の関係からと思われるが、西山地のものは伏流水のガラ場の石の下に産卵し、八方池では沼の落葉の下に産卵していたが、東山地のものはほとんどがサワガニの作った穴を利用し、伏流水の土穴に産卵している。

5、ハクバサンショウウオ

該種は一九八七年に新種登録された山椒魚である。分布が白馬村落倉湿原を中心に、白馬連峰の周辺のみに限られている種で、数も少なく環境庁の「絶滅危惧ＩＢ類」に指定されている希少種である。

筆者は今年、白馬村の湿原調査の一環として、落倉地籍の両生爬虫類の調査を行った。その結果、同地籍には僅かに水が浸み出す程度の湿地まで含めると、三〇ヶ所近い湿地があり、その内、産卵適地と思われる一九ヶ所の内一六ヶ所で該種の産卵を確認することができた。

産卵が見られなかった三ヶ所についても二ヶ所は、過去に産卵が見られた所であるが、その後近くにペンションが沢山建ち、その雑排水が湿原に流入するようになってからは産卵しなくなったものである。

調査のついでに近隣の類似湿原についても産卵状況調査を行なってみた。栂池方面には標高の高い所まで湿原が展開しているので、該種の垂直分布の限界を調べるのが主目的だった。落倉地籍では同地区の最高所の一、〇九〇㍍の湿地にも産卵しているからである。

調査の結果、栂池地籍でも標高一、〇〇〇㍍の湿地では産卵が確認されたが、一、五七〇㍍の栂ノ森や、一、七二〇㍍の神ノ田圃の湿地では産卵は確認することができなかった。

また、低地でも白馬村飯田のアヤメ池湿原や大町市の居谷里湿原を調査したが、ここでも産卵は確認できなかった。両地区共に流水を見ると、有機質が多く一部には水綿菌のコロニーが見られ、落倉地籍の水質より劣っているように見えた。

ハクバサンショウウオは流水性のサンショウウオで、水質のきれいな湧水近くの水深一～一〇㌢、流速〇・〇三～〇・一五㍍（毎秒）程度の所に産卵する山椒魚である。現在のところ上記以外では新潟県青海町権現山（二六〇㍍）と糸魚川市大所川の上流の木地屋の湿地（新潟大学前教授岩沢久彰氏の私信）の二ヶ所のみが全国的に見て産卵が確認されているだけの山椒魚である。

写真２．冬眠に集まってきたハクバサンショウウオ
1996年11月　白馬村落倉にて

6、ヒダサンショウウオ

該種の北アルプスの白馬連峰の山塊からの生息報告は、新潟県青海川の支流（標高五〇㍍）（樋熊一九六一）が最初で、その後、同町の大沢（岩沢一九八二）と千丈峰（標高六五〇㍍）（岩沢一九八五）でも発見された。また、蓮華温泉への途中の白池（標高一、一〇〇㍍）でも一九八五年に発見されている。

同山塊の長野県側の記録では、姫川の支流松川の標高九〇〇㍍の左右両岸で、九〇年一〇月三〇日に冬眠中の成体を筆者が採集。小谷村栂池スキー場の潤沢からは、九五年（柿本修一）、白馬村では楠川の小支流の落倉地籍で九五年に幼生及び成体を採集（柿本・筆者）した。

また、九八年七月一四日には同川の支流北岩岳沢のおばの山沢で、ハコネサンショウウオと混棲している該種の幼生多数を筆者は確認した。

大町市方面は未調査だが、富山県側に関しては、同県が一九八三年から翌年にかけて行なった調査で、有峯大多和峠、大山町長棟川銀砂谷、立山町大辻山などで生息が確認されている（『富山県の両生爬虫類』一九八七富山県）ほか、富山大学調査団が一九六四年に行った「立山山系とその周辺の調査」で、針ノ木谷で該種を発見している。（『北アルプスの自然』植木忠夫）ので、大町市側にも生息の可能性が高い。今後の調査を待ちたい。

次に旧フォッサマグナの海だった新第三紀層の小谷山地方面の生息状況について見ると、新潟県の笹ヶ峰黒沢（標高一、四〇〇㍍）で六二年一〇月に採集された（岩沢六四）ほか、県境の長野県小谷村戸土でも生息が確認されている（九三年一二月上越環境科学センター梅林正氏談）。

白馬村方面では八六年十月に、懸川雅市・岸富士夫によって菅沢で採集されたほか、筆者は九六年八月小谷地川の支流白沢の源流部で幼生を採集、九七年一一月には、白沢トンネル近くで冬眠中の成体を採集した。また、九八年九月の調査で、青鬼沢奥の支流（八八〇㍍）峰方沢の支流深見沢（一、〇〇〇㍍）、小谷地川の支流海道沢、谷地川の支流熊ヶ入沢（九〇〇㍍）での生息を確認したほか、小川村小川神社西の沢や鬼無里村一の坂の中沢でも生息を確認した（九八年八月幼生採集）。

小谷山地は美麻村中央部の土尻川まで続いている。美麻村村誌で聞取り調査を行なったところ、片岡沢の流域にはサンショウウオが生息しているとのことで、九六年の春、下流から本流を中心に調べたが確認できなかった。そこで支流の上流部を調べたら大岩沢・岩小屋沢、大倉沢の上流部で該種の幼生を多数採集したほか、一〇月末には冬眠に集まった成体を採集した。

美麻村では該種は土尻川の支流の丸切沢や小岩岳沢の上流域にも数は少ないが生息しているほか、美麻村との境の大町市和知場地籍でも生息を確認した（九七年九月幼生採集）。

しかし、ここより以南の中山山地では、八坂村も含めサンショウウオが棲んでいるという情報はない。

7、ヒアカリというヘビ

白馬村誌の聞取り調査時にも土地の人から僅かではあるが、ヒアカリという赤く小さいヘビのことを聞いたが、美麻村誌で村内全域に亘り、一五人の方に聞取り調査したとこ

ろ、大半の方からヒアカリという赤くて小さいヘビが棲んでい、たまに見かけるとのことであった。

このヘビについて土地の人は、咬みつかれるとそ人の命はその日限り、日が明るい内だけで、日暮れまでには死ぬ、猛毒のヘビだと皆信じきっていた。

日本本土にはマムシ以外に猛毒なヘビはいないし、マムシは赤くない。そこでこの謎のヘビの実体を是非とも知りたく、村の広報を通じて村民の方へ協力を求め、ヒアカリという赤くて小さいヘビを見たら捕獲し、村誌編集室へ連絡するよう依頼した。聞取り調査でヒアカリを見たという方にも直接捕獲方をお願いした。そして、二年間待ったが一件の連絡ももらえなかった。

話では、ヒアカリは赤といっても小豆色で、体長は三〇～四〇㌢のヘビで、猛毒を持つとはいうものの、実際に咬まれて死んだという例はないという。そうすると迷信かもれない。これに似た迷信のあるヘビにヒバカリがある。このヘビも咬まれるとその人の命はその日ばかりで二日ともたないという迷信を持つヘビだが実際は無毒のヘビで、体色は全体に褐色で首のところに背にかけて帯状に黄色紋があるのが特徴。

このほか、毒はないが赤くて小さいヘビというと、赤ジムグリが頭に浮かぶ。アカジムグリは以前はジムグリと別種とされたが、最近はジムグリの無斑型ということに統一された。ジムグリは全体に幼体の時は赤みが強く、背や腹部に黒斑を持たない無斑紋型のものもけっこう棲息しているという。従って実物を見ないので何とも言えないが、民間で呼ぶヒアカリは、どうやらヒバカリかジムグリの無斑紋型らしい。

8、環境ホルモンの影響か両生類に産卵異変

昨年から「環境ホルモン」という言葉がときどき聞かれるようになった。正式には「外因性内分泌　乱物質」というらしいが、ごく微量で動物をまともなオスにさせない働きをする物質のことらしい。以前は糸魚川市から送られてきて、大北地方の料理屋の食膳でよく目にしたバイ貝がここ数年見かけなくなったと思ったら、受精がうまくできなくなってこの貝の養殖がだめになったとのことで、環境ホルモンの影響によるものだとテレビを見て驚いた。

しかし、動物の正常な生殖を狂わせるこの物質はまだ特定できたわけでなく、これからの調査を待たねばならないとのことであるが、いろいろな動物に影響が起っているようで、最近の若い男性の精子の数も減ってきているとのことで深刻な問題だ。

そういえば今年の春の調査で、両生類の産卵にも異変が起こり、無精卵が多く見られるようになったことに気付いた。昨年まではこんなことはなかったのに。

無精卵に気付いたのは今年五月六日の白馬村落倉でのハクバサンショウウオの産卵調査の時だった。ここは三年前から継続して産卵調査をしている場所である。昨年までは無精卵は一個もなかったのに、今年はこの日二ヶ所で二対＋一対の計三対の無精卵が確認された。

また、六月二日の栂池神ノ田圃湿原での調査時には、クロサンショウウオの卵（産卵一一対）には異変は見られなかったが、アズマヒキガエル数匹分の卵紐はほとんどが無精卵であった。

北アルプスでの両生類の無精卵現象については、クロサンショウウオについて本誌の四二巻第一〇号（九七年一〇月刊）に、竹村昭八氏が種池での現象について報告しているので、氏に電話してお聞きすると、このような現象は平成六年頃から見られるようになり、九八年の産卵でも総産卵数の一〇％くらいが無精卵だったとのお話であった。化学物質とは縁がないと思われる高山にまで、魔の手がしのび寄っているこの頃である。

（爬虫・両棲学会会員、白馬村在住）

写真３．冬眠に集まってきたヒダサンショウウオ
1997年10月30日　美麻村片岡沢の支流の岩小屋沢にて

バックナンバーのお知らせ

今回、長沢武氏による「最近の北ア山麓両生・爬虫類事情」の文中で紹介された「山と博物館」のバックナンバーがあります。巻号は次のとおりです。内容は主なものの紹介ですが、どうぞご了承下さい。

第36巻第6号（平成3年6月）
最近の北ア山麓両棲類事情　長沢　武
第42巻第10号（平成9年10月）
鹿島槍に魅せられて　竹村昭八

バックナンバーの請求方法

右記にご希望のものがありましたら、一部一〇〇円でおわけします。巻号と部数を明記の上、現金書留か口座振替で大町山岳博物館宛ご送金ください。（送料当方負担）

お知らせ

大町山岳博物館では「キノコ展」と題し、九月二三日(水)(祝)から九月二七日(日)まで、キノコに関する展示を行います。

大町市周辺のキノコを展示し、身近なキノコの不思議な生態について紹介します。

会場は山岳博物館講堂で、期間中の入場時間は午前九時から午後四時三〇分までです。

「キノコ展」の入場は無料となっていますので、多くの方にご高覧いただけるよう皆様のご来館をお待ちしております。

山と博物館第43巻第9号
一九九八年九月二十五日発行
発行　〒399-8301 長野県大町市大字大町八〇五六－一
大町山岳博物館
TEL〇二六一－二二－〇二一一
印刷　大糸タイムス印刷部
年額　一、五〇〇円（送料共）（切手不可）
定価　郵便振替口座番号〇〇六四〇－七－一〇〇九